日蓮大聖人御書全集

しょうほっけだいもくしょう

唱法華題目抄

新版1～23

唱法華題目抄

文応元年（’60）5月28日　39歳

ある人、予に問うて云わく、世間の道俗、させる法華経の文義を弁えずとも、一部・一巻・四要品・自我偈・一句等を受持し、あるいは自らもよみかき、もしは人をしてもよみかかせ、あるいは我とよみかかざれども経に向かい奉り合掌・礼拝をなし香華を供養し、あるいは上のごとく行ずることなき人も、他の行ずるを見てわずかに随喜の心をおこし国中にこの経の弘まれることを悦ばん。これ体の

わずかのことによりて、世間の罪にも引かれず、彼の功徳に引かれて、小乗の初果の聖人の度々人天に生まれてしかも悪道に堕ちざるがごとく、常に人天の生をうけ、終に法華経を心得るものと成って、十方浄土にも往生し、またこの土においても即身成仏することあるべきや。委細にこれを聞かん。

答えて云わく、させる文義を弁えたる身にはあらざれども、法華経・涅槃経ならびに天台・妙楽の釈の心をもって推し量るに、かりそめにも法華経を信じていささかも謗

を生ぜざらん人は、余の悪にひかれて悪道に堕つべしとは覚おぼえず。ただし、悪知識と申して、わずかに権教を知れる人智者の由をして法華経を我らが機に叶い難き由を和らげ申さんを、誠と思って、法華経を随喜せし心を打ち捨て移余教へうつりはてて、一生さて法華経へ帰り入らざらん人は、悪道に堕つべきこともありなん。

仰せについて疑わしきこと侍り。実にてや侍るらん、「法華経に説かれて候」とて智者の語らせ給いしは、「昔、三千塵点劫の当初、大通智勝仏と申す仏います。その仏の

凡夫にていましける時、十六人の王子おわします。彼の父の王、仏にならせ給いて一代聖教を説き給いき。十六人の王子もまた出家して、その仏の御弟子とならせ給いけり。大通智勝仏、法華経を説き畢わらせ給いて定に入らせ給いしかば、十六人の王子の沙弥、その前にして、かわるがわる法華経を講じ給いけり。その所説を聴聞せし人、幾千万ということをしらず。当座に悟りをえし人は不退の位に入りにき。また法華経をおろかに心得る結縁の衆もあり。その人々、当座・中間に不退の位に入らずして三千塵点劫

経

をへたり。その間、またつぶさに六道四生に輪回し、今日、釈迦如来の法華経を説き給うに、不退の位に入る。いわゆる舎利弗・目連・迦葉・阿難等これなり。なおなお信心薄き者は、当時も覚らずして未来無数劫を経べきか。知らず、我らも大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん。

この結縁の衆をば、天台・妙楽は名字・観行の位にかないたる人なりと定め給えり。名字・観行の位は、一念三千の義理を弁え、十法成乗の観を凝らし、能く能く義理を弁えたる人なり。『一念随喜』『五十展転』と申すも、天台・

妙楽の釈のごときは、皆、観行五品の初随喜の位と定め給えり。博地の凡夫のことにはあらず。

しかるに、我らは末代の一字一句等の結縁の衆、一分の義理をも知らざらんは、あに無量の世界の塵点劫を経ざらんや。これひとえに、理深解微の故に、教は至って深く機は実に浅きがいたすところなり。ただ弥陀の名号のみを唱えて順次生に西方極楽世界に往生し、永く不退の無生忍を得て、阿弥陀如来・観音・勢至等の法華経を説き給わん時、聞いて悟りを得んにはしかじ。しかるに、弥陀の本願は、

有智・無智、善人・悪人、持戒・破戒等をも択ばず、ただ一念唱うれば、臨終に必ず弥陀如来、本願の故に来迎し給う。

これをもって思うに、この土にして法華経の結縁を捨て浄土に往生せんとおもうは、億千世界の塵点を経ずして疾く法華経を悟らんがためなり。法華経の根機にあたわざる人の、この穢土にて法華経にいとまをいれて一向に念仏を申さざるは、法華経の証は取り難く、極楽の業は定まらず、中間になりて、中々法華経をおろそかにする人にてやおわしますらん」と申し侍るはいかに。

その上、只今承り候えば、わずかに法華経の結縁ばかりならば、三悪道に堕ちざるばかりにてこそ候え、六道の生死を出ずるにはあらず。念仏の法門は、なにと義理を知らざれども弥陀の名号を唱え奉れば浄土に往生する由を申すは、遥かに法華経よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞こえ侍れ。

答えて云わく、誠に仰せめでたき上、智者の御物語にて侍るなれば、さこそと存じ候えども、ただし、もし御物語のごとく侍らば、すこし不審なること侍り。

大通結縁の者をあらあらうちあてがい申すには名字・観行の者とは釈せられて侍れども、正しくは名字即の位の者と定められ侍る上、退大取小の者とて、法華経をすて権教にうつり後には悪道に堕ちたりと見えたる上、正しく法華経を誹謗してこれを捨てし者なり。たとい義理を知るようなる者なりとも、謗法の人にあらん上は、三千塵点・無量塵点も経べく侍るか。「五十展転」「一念随喜」の人々を観行初随喜の位の者と釈せられたるは、末代の我らが随喜等は彼の随喜の中には入るべからずと仰せ候か。こ

れを「天台・妙楽、初随喜の位と釈せられたり」と申さるるほどにては、また名字即と釈せられて侍る釈はすてらるべきか。

詮ずるところ、仰せの御義を委しく案ずれば、おそれにては候えども、謗法の一分にやあらんずらん。その故は、法華経を我ら末代の機に叶い難き由を仰せ候は、末代の一切衆生は穢土にして法華経を行じて詮無きことなりと仰せらるるにや。もし、さように侍らば、末代の一切衆生の中に、この御詞を聞いて、既に法華経を信ずる者も打ち

捨てて、いまだ行ぜざる者も行ぜんと思うべからず。随喜の心も留め侍らば、謗法の分にやあるべかるらん。もし謗法の者に一切衆生なるならば、いかに念仏を申させ給うとも、御往生は不定にこそ侍らんずらめ。

また、弥陀の名号を唱え極楽世界に往生をとぐべきよしを仰せられ侍るは、いかなる経論を証拠としてこの心はつき給いけるやらん。正しくつよき証文候か。もしなくば、その義たのもしからず。

前に申し候いつるがごとく、法華経を信じ侍るは、させ

る解なけれども三悪道には堕つべからず候。六道を出ずることは、一分のさとりなからん人は有り難く侍るか。ただし、悪知識に値って法華経随喜の心を云いやぶられて候わんは、力及ばざるか。

また、仰せについて驚き覚え侍り。その故は、法華経は末代の凡夫の機に叶い難き由を智者申されしかば、さかと思い侍るところに、只今の仰せのごとくならば、弥陀の名号を唱うとも、法華経をいいうとむるとがによりて、往生をも遂げざる上悪道に堕つべきよし承るは、ゆゆ

しき大事にこそ侍れ。

そもそも、「大通結縁の者は、謗法の故に六道に回るも、また名字即の浅位の者なり。また『一念随喜』『五十展転』の者もまた名字・観行即の位」と申す釈は、いずれの処に候やらん。委しく承り候わばや。また、義理をも知らざる者の、わずかに法華経を信じ侍るが、悪知識の教えによって法華経を捨てて権教に移るより外の世間の悪業に引かれては、悪道に堕つべからざる由申さるるは、証拠あるか。また、無智の者の念仏申して往生するといずれに見

えてあるやらんと申し給うこそ、よに事あたらしく侍れ。双観経等の浄土の三部経、善導和尚等の経釈に明らかに見えて侍らん上は、なにとか疑い給うべき。

答えて曰わく、大通結縁の者を、退大取小の謗法、名字即の者と申すは、私の義にあらず。天台大師、文句の第三の巻に云わく「法を聞いていまだ度せずして世々に相値って今に声聞地に住する者有り。即ち彼の時の結縁の衆なり」と釈し給いて侍るを、妙楽大師、疏記の第三に重ねてこの釈の心を述べ給いて云わく「ただ、いまだ品に入らざる

を、ともに結縁と名づくるが故に」文。文の心は、大通結縁の者は名字即の者となり。また、天台大師、玄義の第六に大通結縁の者を釈して云わく「もしは信、もしは謗。因って倒れ、因って起く。喜根をば謗ずといえども、後に要ず度を得るがごとし」文。文の心は、大通結縁の者の三千塵点を経るは謗法の者なり、例せば、勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしがごとしと釈す。『五十展転』の人は五品の初めの初随喜の位」と申す釈もあり。また「初随喜の位の先の名字即」と申す釈もあり。疏記の第十に云わく「初めに

法会にして聞く。容にこれ初品なるべし。第五十人は必ず随喜の位の初めに在る人なり」文。文の心は、初会聞法の人は必ず初随喜の位の内、第五十人は初随喜の位の先の名字即と申す釈なり。

その上、「五種法師にも、受持・読・誦・書写の四人は自行の人、大経の九人の先の四人は解無き者なり。解説は化他、後の五人は解有る人」と証し給えり。疏記の第十に五種法師を釈するには、「あるいは全くいまだ品に入らず」、また云わく「一向いまだ凡位に入らず」文。文の心は、五種

法師は観行五品と釈すれども、また五品已前の名字即の位とも釈するなり。これらの釈のごとくんば、義理を知らざる名字即の凡夫が随喜等の功徳も、経文の「一偈一句、一念随喜の者」「五十展転」等の内に入るかと覚え候。

いかにいわんや、この経を信ぜざる謗法の者の罪業は譬喩品に委しくとかれたり。持経者を謗ずる罪は法師品にとかれたり。この経を信ずる者の功徳は分別功徳品・随喜功徳品に説けり。**謗法と申すは違背の義なり。随喜と申すは随順の義なり。**させる義理を知らざれども一念も貴き

由申すは、違背・随順の中にはいずれにか取られ候べき。また末代無智の者のわずかの供養・随喜の功徳は経文には載せられざるか、いかん。

その上、天台・妙楽の釈の心は、他の人師ありて法華経の「乃至、童子の戯れに」「一偈一句」「五十展転」の者を爾前の諸経のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば、謗法の者と定め給えり。しかるに、我が釈を作る時、機を高く取って末代造悪の凡夫を迷わし給わんは、自語相違にあらずや。故に、妙楽大師、「五十展転」の人を釈して云わ

く「恐らくは、人謬って解せる者、初心の功徳の大なることを測らずして、功を上位に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、もって経力を顕す」文。文の心は、謬って法華経を説かん人の、この経は利智精進・上根上智の人のためといわんことを、仏おそれて、下根下智・末代の無智の者のわずかに浅き随喜の功徳を四十余年の諸経の大人・上聖の功徳に勝れたることを顕さんとして、「五十展転」の随喜は説かれたり。故に、天台の釈には、外道・小乗・権大乗までたくらべ来って、

法華経の最下の功徳が勝れたる由を釈せり。

ゆえに、阿竭多仙人は十二年が間恒河の水を耳に留め、耆兎仙人は一日の中に大海の水をすいほす。かくのごときの得通の仙人は、小乗の阿含経の三賢の浅位の一通もなき凡夫には、百千万倍劣れり。三明六通を得たりし小乗の舎利弗・目連等は、華厳・方等・般若等の諸大乗経の未断三惑の一通もなき「一偈一句」の凡夫には、百千万倍劣れり。華厳・方等・般若経を習い極めたる等覚の大菩薩は、法華経をわずかに結縁をなせる未断三惑・無悪不造の

末代の凡夫には百千万倍劣れる由、釈の文顕然なり。

しかるを、当世の念仏宗等の人、我が身の権教の機にて実経を信ぜざる者は、方等・般若の時の二乗のごとく自身をはじしめてあるべきところに、あえてその義なし。あまつさえ、世間の道俗の中に、わずかに観音品・自我偈などを読み、たまたま父母孝養なんどのために一日経等を書くことあれば、いいさまたげて云わく「善導和尚は、念仏に法華経をまじうるを雑行と申し、百の時は希に一・二を得、千の時は希に三・五を得ん、乃至、千中無一と仰せら

れたり。いかにいわんや、智慧第一の法然上人は、法華経等を行ずる者をば、祖父の履あるいは群賊等にたとえられたり」なんどいいうとめ侍るは、かくのごとく申す師も弟子も阿鼻の焔をや招かんずらんと申す。

問うて云わく、いかなるすがた、ならびに語をもってか、法華経を世間にいいうとむる者には侍るや。よにおそろしくこそおぼえ候え。

答えて云わく、始めに「智者の申され候」と御物語り候いつるこそ、法華経をいいうとむる悪知識の語にて侍れ。

末代に法華経を失うべき者は、心には一代聖教を知りたりと思って、しかも心には権実二経を弁えず、身には三衣一鉢を帯し、あるいは阿練若に身をかくし、あるいは世間の人にいみじき智者と思われて、しかも法華経をよくよく知る由を人に知られなんとして、世間の道俗には三明六通の阿羅漢のごとく貴ばれて法華経を失うべしと見えて候。

問うて云わく、その証拠いかん。

答えて云わく、法華経勧持品に云わく「諸の無智の人の、

悪口・罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん。我らは皆当に忍ぶべし」文。妙楽大師、この文の心を釈して云わく「初めに一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり」文。文の心は、この一行は在家の俗男・俗女が権教の比丘等にかたらわれて敵をすべしとなり。

経に云わく「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん」文。妙楽大師、この文の心を釈して云わく「次に一行は道門増上慢の者を明かす」文。文の心は、悪世末法の

権教の諸の比丘、我法を得たりと慢じて、法華経を行ずるものの敵となるべしということなり。

経に云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂って、人間を軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん。この人は悪心を懐き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮りて、好んで我らが過を出ださん。しかもかくのごとき言を作さん。『この諸の比丘等は、利養を貪らんがための故

に、外道の論議を説く。自らこの経典を作って、世間の人を誑惑す。名聞を求めんがための故に、分別してこの経を説く』と。常に大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん」已上。

妙楽大師、この文を釈して云わく「三に七行は僭聖増上慢の者を明かす」文。経ならびに釈の心は、悪世の中に多くの比丘有って、身には三衣一鉢を帯し、

阿練若に居して、行儀は大迦葉等の三明六通の羅漢のごとく、在家の諸人にあおがれて、一言を吐けば如来の金言のごとくおもわれて、法華経を行ずる人をいやぶらんがために、国王・大臣等に向かい奉って「この人は邪見の者なり。法門は邪法なり」なんどいいうとむるなり。

上の三人の中に、第一の俗衆の毀りよりも第二の邪智の比丘の毀りはなおしのびがたし。また第二の比丘よりも第三の大衣の阿練若の僧は甚だし。

この三人は、当世の権教を手本とする文字の法師、なら

びに諸経論の「言語の道断ゆ」の文を信ずる暗禅の法師、ならびに彼らを信ずる在俗等、四十余年の諸経と法華経との権実の文義を弁えざる故に、華厳・方等・般若等の「心と仏と衆生」「即心是仏」「即ち十方・西方に往く」等の文と、法華経の「諸法実相」「即ち十方・西方に往く」の文と、語の同じきをもって義理のかわれるを知らず。

あるいは諸経の「言語の道断え、心行の所滅す」の文を見て、一代聖教には如来の実事をば宣べられざりけりなんどの邪念をおこす。故に、悪鬼、この三人に入って末代

の諸人を損じ、国土をも破るなり。

故に、経文に云わく「濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん乃至仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず」文。文の心は、濁悪世の時、比丘、我が信ずるところの教えは仏の方便随宜の法門ともしらずして、権実を弁えたる人出来すれば罵り破しなんどすべし、これひとえに悪鬼の身に入りたるをしらずと云うなり。されば、末代の愚人の恐るべきことは、刀杖・虎狼・十悪五逆等より

も、三衣一鉢を帯せる暗禅の比丘と、ならびに権経の比丘を貴しと見て実経の人をにくまん俗侶等なり。

故に、涅槃経二十二に云わく「悪象等においては心に恐怖なく、悪知識においては怖畏の心を生ず。何をもっての故に。この悪象等はただ能く身を壊るのみにして、心を壊ること能わず。悪知識は二つともに壊るが故に。乃至悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至る」文。この文の心を章安大師宣べて云わく「諸の悪象等は、ただこれ悪縁なるのみにして、人の悪心を生ず

ること能わず。悪知識は甘談・詐媚・巧言・令色もて人を牽いて悪を作さしむ。悪を作すをもっての故に人の善心を破る。これを名づけて殺となす。即ち地獄に堕つ」文。文の心は、**悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を巧みにして、愚癡の人の心を取って善心を破るということなり。**

総じて、涅槃経の心は、十悪五逆の者よりも謗法・闡提のものをおそるべしと誡めたり。闡提の人と申すは、法華経・涅槃経を云いうとむる者と見えたり。当世の念仏者

等、法華経を知り極めたる由をいうに、因縁・譬喩をもって釈し、よくよく知る由を人にしられて、しかして後には、この経のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ、強き弓・重き鎧、かいなき人の用にたたざる由を申せば、無智の道俗さもと思って、実には叶うまじき権教に心を移して、わずかに法華経に結縁しぬるをも翻し、また人の法華経を行ずるをも随喜せざる故に、師弟ともに謗法の者となる。

これによって、謗法の衆生、国中に充満して、たまた

ま仏事をいとなみ法華経を供養し追善を修するにも、念仏等を行ずる謗法の邪師の僧来って、法華経は末代の機に叶い難き由を示す。故に、施主もその説を実と信じてあるあいだ、訪わるる過去の父母・夫婦・兄弟等はいよいよ地獄の苦を増し、孝子は不孝・謗法の者となり、聴聞の諸人は邪法を随喜し、悪魔の眷属となる。

日本国中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず、たまたま仏法を知る智者は国の人に捨てられ、守護の善神は法味をなめざる故に威光を失い利生を止め、この国をす

て他方に去り給い、悪鬼は便りを得て国中に入り替わり、大地を動かし、悪風を興し、一天を悩まし、五穀を損ず。故に、飢渇出来し、人の五根には鬼神入って精気を奪う。これを疫病と名づく。一切の諸人、善心無く、多分は悪道に堕つること、ひとえに悪知識の教えを信ずる故なり。

仁王経に云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し、横しまに法制を作って仏戒に依らず。これを破仏・破国の因縁

となす」文。文の心は、末法の諸の悪比丘、国王・大臣の御前にして、国を安穏ならしむるようにして終に国を損じ、仏法を弘むるようにして還って仏法を失うべし、国王・大臣、この由を深く知ろしめさずしてこの言を信受する故に、国を破り仏教を失うという文なり。この時、日月度を失い、時節もたがいて夏はさむく冬はあたたかに、秋は悪風吹き、赤き日月出で、望朔にあらずして日月蝕し、あるいは二・三等の日出来せん。大火・大風・彗星等おこり、飢饉・疫病等あらんと見えたり。国を損じ人を悪道におと

す者は、悪知識に過ぎたることなきか。

問うて云わく、始めに智者の御物語とて申しつるは、詮ずるところ、後世のことの疑わしき故に善悪を申して承らんためなり。彼の義等は恐ろしきことにあるにこそ侍るなれ。一文不通の我らがごとくなる者は、いかにしてか法華経に信をとり候べき。また心ねをば、いかように思い定め侍らん。

答えて云わく、この身の申すことをも一定とおぼしめさるまじきにや。その故は、かように申すも天魔波旬・悪鬼等

の身に入って人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候わん。一切は賢きが智者にて侍るにや。

問うて云わく、もしかように疑い候わば、我が身は愚者にて侍り、万の智者の御語をば疑い、さて信ずる方も無くして空しく一期過ごし侍るべきにや。

答えて云わく、仏の遺言に「法に依って人に依らざれ」と説かせ給いて候えば、経のごとくに説かざるをば、いかにいみじき人なりとも御信用あるべからず候か。また「了義経に依って不了義経に依らざれ」と説かれて候え

ば、愚癡の身にして一代聖教の前後・浅深を弁えざらんほどは、了義経に付かせ給い候え。

了義経・不了義経も多く候。阿含の小乗経は不了義経、華厳・方等・般若・浄土の観経等は了義経。

また、四十余年の諸経を法華経に対すれば不了義経、法華経は了義経。涅槃経を法華経に対すれば、法華経は了義経、涅槃経は不了義経。大日経を法華経に対すれば、大日経は不了義経、法華経は了義経なり。故に、四十余年の諸経ならびに涅槃経を打ち捨てさせ給いて、法華経を

師匠と御憑み候え。法華経をば、国王・父母、日月・大海・須弥山・天地のごとくおぼしめせ。諸経をば、関白・大臣・公卿乃至万民、衆星・江河・諸山・草木等のごとくおぼしめすべし。

我らが身は、末代造悪の愚者、鈍者、法器にあらざるの者。国王は臣下よりも人をたすくる人、父母は他人よりも子をあわれむ者、日月は衆星より暗を照らす者、法華経は機に叶わずんば、いわんや余経は助け難しとおぼしめせ。また釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・観音・勢至・

普賢・文殊等の一切の諸の仏菩薩は我らが慈悲の父母、この仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理はただ法華経にのみとどまれりとおぼしめせ。諸経は悪人・愚者・鈍者・女人・根欠等の者を救う秘術をば、いまだ説き顕さずとおぼしめせ。法華経の一切経に勝れ候故は、ただこのことに侍り。

しかるを、当世の学者、法華経をば一切経に勝れたりと讃めて、しかも末代の機に叶わずと申すを皆信ずること、あに謗法の人に侍らずや。ただ一口におぼしめし切らせ給

い候え。詮ずるところ、法華経の文字を破りさきなんどせんには、法華経の心やぶるべからず。また世間の悪業に対して云いうとむるとも、人々用いるべからず。ただ、相似たる権経の義理をもって云いうとむるにこそ、人はたぼらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云わく、ある智者の申され候いしは「四十余年の諸経と八箇年の法華経とは、成仏の方こそ、爾前は難行道、法華経は易行道にて候え。往生の方にては、同じきことにして、易行道に侍り。法華経を書き読んでも、

十方の浄土、阿弥陀仏の国へも生まるべし。観経等の諸経に付いて弥陀の名号を唱えん人も、往生を遂ぐべし。ただ機縁の有無に随って、いずれをも諍うべからず。ただし、弥陀の名号は、人ごとに行じ易しと思って日本国中に行じつけたることなれば、法華経等の余行よりも易きにこそ」と申されしはいかん。

答えて云わく、仰せの法門は、さも侍るらん。また世間の人も多くは道理と思いたりげに侍り。ただし、身にはこの義に不審あり。その故は、前に申せしがごとく、末代の凡夫は、

智者(ちしゃ)というともたのみなし、世(よ)こぞりて上代(じょうだい)の智者(ちしゃ)には及(およ)ぶべからざるが故(ゆえ)に。愚者(ぐしゃ)と申(もう)すともいやしむべからず、卑(ひ)

経論(きょうろん)の証文(しょうもんけんねん)顕然(けんねん)ならんには。

そもそも、無量義経(むりょうぎきょう)は法華経(ほけきょう)を説(と)かんがための序分(じょぶん)なり。しかるに、始(はじ)め寂滅道場(じゃくめつどうじょう)より今(いま)の常在霊山(じょうざいりょうぜん)の無量義経(むりょうぎきょう)に至(いた)るまで、その年月日数(としつきひかず)を委(くわ)しく計(かぞ)え挙(あ)ぐれば四十余年(しじゅうよねん)なり。その間(あいだ)の説(と)くところの経(きょう)を挙(あ)ぐるに、華厳(けごん)・阿含(あごん)・方等(ほうどう)・般若(はんにゃ)なり。談(だん)ずるところの法門(ほうもん)は三乗(さんじょう)・五乗(ごじょう)の習(なら)うところの法門(ほうもん)なり。修行(しゅぎょう)の時節(じせつ)を定(さだ)むるには「菩薩(ぼさつ)の

歴劫修行を宣説す」と云い、随自意・随他意を分かつにはこれを随他意と宣べ、四十余年の諸経と八箇年の所説との語同じく義替われることを定むるには「文辞は一つなりといえども、義は各異なり」ととけり。成仏の方は別にして往生の方は一つなるべしともおぼえず。華厳・方等・般若、究竟最上の大乗経、頓悟・漸悟の法門、皆「未顕真実」と説かれたり。

この大部の諸経すら未顕真実なり。いかにいわんや、浄土の三部経等の往生極楽ばかり未顕真実の内にもれんや。そ

の上、経々ばかりを出だすのみにあらず、既に年月日数を出だすをや。しかれば、華厳・方等・般若等の弥陀往生、すでに未顕真実なること疑いなし。観経の弥陀往生に限って、あに「留難多きが故なり」の内に入らざらんや。

もし、随自意の法華経の往生極楽を随他意の観経の往生極楽に同じて易行道と定めて、しかも易行の中に取ってもなお観経の念仏往生は易行なりとこれを立てらるれば、権実雑乱の失、大謗法たる上、一滴の水漸々に流れて大海となり、一塵積もって須弥山となるがごとく、漸く

権経の人も実経にすすまず、実経の人も権経におち、権経の人次第に国中に充満せば、法華経随喜の心も留まり、国中に王なきがごとく、人の神を失えるがごとく、法華・真言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神等一切の聖人国を捨てて去れば、悪鬼便りを得て乱れ入り、悪風吹いて五穀も成らしめず、疫病流行して人民をや亡ぼさんずらん。

この七・八年が前までは「諸行は永く往生すべからず。善導和尚の『千中無一』と定めさせ給いたる上、選択には

『諸行を抛てよ。行ずる者は群賊』と見えたり」なんど放語を申し立てしが、またこの四・五年の後は「選択集のごとく人を勧めん者は、謗法の罪によって師檀共に無間地獄に堕つべしと経に見えたり」と申す法門出来したりげにありしを、始めは念仏者こぞりて不思議の思いをなす上、『念仏を申す者、無間地獄に堕つべし』と申す悪人・外道あり」なんどののしり候いしが、「念仏者、無間地獄に堕つべし」と申す語に智慧つきて、各選択集を委しく披見するほどに、げにも謗法の書とや見なしけん、千中無一の

悪義を留めて諸行往生の由を念仏者ごとにこれを立つ。しかりといえども、ただ口にのみゆるして心の中はなお本の千中無一の思いなり。

在家の愚人は、内心の謗法なるをばしらずして諸行往生の口にばかされて、「念仏者は法華経をば謗ぜざりけるを、法華経を謗ずる由を聖道門の人の申されしは僻事なり」と思えるにや、一向「諸行は千中無一」と申す人よりも謗法の心はまさりて候なり。失なき由を人に知らせて、しかも念仏ばかりをまた弘めんとたばかるなり。ひとえに

天魔の計りごとなり。

問うて云わく、天台宗の中の人の立つることあり。「天台大師、爾前と法華と相対して爾前を嫌うに二義あり。一には約部。四十余年の部と法華経の部と相対して『爾前は麤なり、法華は妙なり』とこれを立つ。二には約教。教えに麤・妙を立て、華厳・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ、華厳・方等・般若等の三乗歴別の修行の法門をば前三教と名づけて麤なりと嫌えり。円頓速疾の方をば嫌わず、法華経に同じて一味の法門とせり」と申すはいかん。

答えて云わく、このことは不審にもすること侍るらん。しかるべしとおぼゆ。天台・妙楽より已来、今に論有ることに侍り。天台の三大部六十巻、総じて五大部の章疏の中にも、約教の時は、爾前の円を嫌う文無し。ただ約部の時ばかり、爾前の円を押しふさねて嫌えり。

日本に二義あり。園城寺には智証大師の釈より起こって爾前の円を嫌うと云い、山門には嫌わずと云う。互いに文釈あり。ともに料簡あり。しかれども今に事ゆかず。

ただし、予が流の義には不審晴れておぼえ候。その故

は、天台大師、四教を立て給うに四つの筋目あり。一には、爾前の経に四教を立つ。二には、法華経と爾前と相対して爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌うことあり。三には、爾前の円をば別教に摂して前三教と嫌い、法華の円をば純円と立つ。四には、爾前の円をば法華に同ずれども、ただ法華経の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜず。この四つの道理を相対して六十巻をかんがうれば、狐疑の氷解けたり。一々の証文は、かつは秘し、かつは繁き故に、これを載せず。

また、法華経の本門にしては、爾前の円と迹門の円とを嫌うこと不審なきものなり。爾前の円をば別教に摂して、約教の時は「前の三つを麤となし、後の一つを妙となす」と云うなり。この時は、爾前の円は無量義経の歴劫修行の内に入りぬ。また、伝教大師の註釈の中に、爾前の八教を挙げて「四十余年未顕真実」の内に入れ、あるいは前三教をば迂回と立て、爾前の円をば直道と云い、無量義経をば大直道と云う。委細に見るべし。

問うて云わく、法華経を信ぜん人は、本尊ならびに行儀、

ならびに常の所行はいかにてか候べき。

答えて云わく、第一に本尊は法華経八巻・一巻・一品、あるいは題目を書いて本尊と定むべしと法師品ならびに神力品に見えたり。また、たえたらん人は釈迦如来・多宝仏を書いても造っても法華経の左右にこれを立て奉るべし。また、たえたらんは十方の諸仏・普賢菩薩等をもつくりかきたてまつるべし。

行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべし。道場を出でては行住坐臥をえらぶべからず。常の所行は題目を

南無妙法蓮華経と唱うべし。たえたらん人は一偈一句をも読み奉るべし。助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・十方諸仏・一切の諸の菩薩・二乗・天人・竜神八部等、心に随うべし。愚者多き世となれば、一念三千の観を先とせず。その志あらん人は、必ず習学してこれを観ずべし。

問うて云わく、ただ題目ばかりを唱うる功徳いかん。

答えて云わく、釈迦如来、法華経をとかんとおぼしめして世に出でましましかども、四十余年のほどは法華経の御名を秘しおぼしめして、御年三十の比より七十余に至る

まで法華経の方便をもうけ、七十二にして始めて題目を呼び出ださせ給えば、諸経の題目にこれを比ぶべからず。その上、法華経の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。

天台大師、玄義十巻を造り給う。第一の巻には略して妙法蓮華経の五字の意を宣べ給う。第二の巻より七の巻に至るまではまた広く妙の一字を宣べ、八の巻より九の巻に至るまでは法蓮華の三字を釈し、第十の巻には経の一字を宣べ給えり。経の一字に華厳・阿含・方等・般若・

涅槃経を収めたり。妙法の二字は、玄義の心は百界千如・心仏衆生の法門なり。止観十巻の心は一念三千・百界千如・三千世間・心仏衆生三無差別と立て給う。一切の諸の仏菩薩、十界の因果、十方の草木・瓦礫等、妙法の二字にあらずということなし。

華厳・阿含等の四十余年の経々、小乗経の題目には大乗経の功徳を収めず。また大乗経にも往生を説く経の題目には成仏の功徳をおさめず。また王にてはあれども王中の王にてなき経も有り。仏もまた経に随って

他仏の功徳をおさめず。平等意趣をもって他仏自仏とおなじといい、あるいは法身平等をもって自仏他仏同じという。実には一仏に一切仏の功徳をおさめず。

今、法華経は四十余年の諸経を一経に収めて、十方世界の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる故に、一仏一切仏にして、妙法の二字に諸仏皆収まれり。故に、妙法蓮華経の五字を唱うる功徳莫大なり。「諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり。妙法は能開なり」としりて、法華経の題目を唱うべし。

問うて云わく、この法門を承ってまた智者に尋ね申し候えば「法華経のいみじきことは左右に及ばず候。ただし、器量ならん人は、ただ我が身ばかりはしかるべし。末代の凡夫に向かって、ただちに、機をも知らず、爾前の教を云いうとめ法華経を行ぜよと申すは、としごろの念仏なんどをば打ち捨て、また法華経にはいまだ功も入れず、有にも無にもつかぬようにてあらんずらん。また、機も知らず法華経を説かせ給わば、信ずる者は左右に及ばず、もし謗ずる者あらば定めて地獄に堕ち候わんずらん。その上、仏も

四十余年の間法華経を説き給わざることは『もしただ仏乗を讃むるのみならば、衆生は苦に没す』の故なりと。在世の機すら、なおしかなり。いかにいわんや末代の凡夫をや。されば、譬喩品には、仏舎利弗に告げて言わく『無智の人の中にして、この経を説くことなかれ』と」云々。これらの道理を申すは、いかんが候べき。

答えて云わく、智者の御物語と仰せ承り候えば、詮ずるところ「末代の凡夫には機をかがみて説け。左右なく説いて人に謗ぜさすることなかれ」とこそ候なれ。彼の人さ

ように申され候わば、御返事候べきようは「そもそも『もしただ仏乗を讃むるのみならば』乃至『無智の人の中にして』等の文を出だし給わば、また一経の内に『およそ見るところ有る。我は深く汝等を敬う』等と説いて、不軽菩薩の杖木・瓦石をもってうちはられさせ給いしをば顧みさせ給わざりしはいかん」と申させ給え。

問うて云わく、一経の内に相違の候なることこそ、よに心得がたく侍れば、くわしく承り候わん。

答えて云わく、方便品等には機をかがみてこの経を説く

べしと見え、不軽品には謗ずともただ強いてこれを説くべしと見え侍り。一経の前後、水火のごとし。

しかるを、天台大師会して云わく「本すでに善有れば、釈迦は小をもってこれを将護し、本いまだ善有らざれば、不軽は大をもってこれを強毒す」文。文の心は、本善根ありて今生の内に得解すべき者のためには、直ちに法華経を説くべし。しかるに、その中になお聞いて謗ずべき機あらば、しばらく権経をもってこしらえて、後に法華経を説くべし。本大の善根もなく、今も法華経を信ずべからず、な

にとなくとも悪道に堕ちぬべき故に、ただ押して法華経を説いてこれを謗ぜしめて逆縁ともなせと会する文なり。

この釈のごときは、末代には善無き者は多く善有る者は少なし。故に悪道に堕ちんこと疑いなし。同じくは法華経を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成すべきか。しかれば、法華経を説いて謗縁を結ぶべき時節なること諍い無きものをや。

また、法華経の方便品に五千の上慢あり。略開三顕一を聞いて広開三顕一の時、仏の御力をもって座をたたしめ

給う。後に涅槃経ならびに四依の辺にして今生に悟りを得せしめ給うと、諸法無行経に、喜根菩薩、勝意比丘に向かって大乗の法門を強いて説ききかせて謗ぜさせしと、この二つの相違をば天台大師会して云わく「如来は悲をもっての故に発遣し、喜根は慈をもっての故に強説す」文。

文の心は、仏は悲の故に、後のたのしみをば閣いて、当時法華経を謗じて地獄におちて苦にあうべきを悲しみ給いて座をたたしめ給いき。譬えば、母の子に病あると知れども、当時の苦を悲しんで左右なく灸を加えざるがごとし。

喜根菩薩は、慈の故に、当時の苦をばかえりみず後の楽を思って強いてこれを説き聞かしむ。譬えば、父は、慈の故に、子に病あるを見て当時の苦をかえりみず後を思う故に灸を加うるがごとし。

また、仏の在世には、仏法華経を秘し給いしかば、四十余年の間、等覚・不退の菩薩、名をしらず。その上、寿量品は法華経八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき。末代の凡夫には左右なくいかんがきかしむべきとおぼゆるところを、妙楽大師釈して云わく「仏世は

当機の故に簡ぶ。末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給えり。

文の心は、仏の在世には、仏、一期の間多くの人不退の位にのぼりぬべき故に、法華経の名義を出だして謗ぜしめず、機をこしらえてこれを説く。仏の滅後には、当機の衆は少なく結縁の衆多きが故に、多分に就いて左右なく法華経を説くべしという文なり。

これ体の多くの品あり。また末代の師は多くは機を知らず。機を知らざらんには、強いて、ただ実教を説くべきか。

されば、天台大師、釈して云わく「等しくこれ見ざれば、ただ大のみを説くに咎無し」文。文の心は、機をも知らざれば大を説くに失なしという文なり。また時の機を見て説法する方もあり。皆国中の諸人、権経を信じて実経を謗じあながちに用いざれば、弾呵の心をもって説くべきか。時によって用否あるべし。

問うて云わく、唐土の人師の中に一分、一向に権大乗に留まって実経に入らざる者は、いかなる故か候。

答えて云わく、仏世に出でましまして、先に四十余年の

権大乗・小乗の経を説き、後には法華経を説いて言わく「もし小乗をもって乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可となす」文。

文の心は、仏ただ爾前の経ばかりを説いて法華経を説き給わずば、仏慳貪の失ありと説かれたり。後に嘱累品にいたりて、仏、右の御手をのべて三たび諫めをなして、三千大千世界の外八方四百万億那由他の国土の諸の菩薩の頂をなでて、未来には必ず法華経を説くべし、もし機たえずば余の深法の四十余年の経を説いて機をこしらえて

法華経を説くべしと見えたり。後に涅槃経に重ねてこのことを説いて、仏の滅後に四依の菩薩ありて法を説くにまた法の四依あり、実経をついに弘めずんば天魔としるべきよしを説かれたり。

故に、如来の滅後、後の五百年・九百年の間に出で給いし竜樹菩薩・天親菩薩等、あまねく如来の聖教を弘め給うに、天親菩薩は、先に小乗の説一切有部の人、倶舎論を造って阿含十二年の経の心を宣べて、一向に大乗の義理を明かさず。次に十地論・摂大乗論釈論等を造って

四十余年の権大乗の心を宣べ、後に仏性論・法華論等を造りてほぼ実大乗の義を宣べたり。竜樹菩薩またしかなり。

天台大師、唐土の人師として、一代を分かつに大小・権実顕然なり。余の人師は、わずかに義理を説けども分明ならず。また証文たしかならず。ただし、末の論師ならびに訳者、唐土の人師の中に、大小をば分かちて大において権実を分かたず、あるいは語には分かつといえども心は権大乗のおもむきを出でず。これらは「不退の諸の菩薩は、その数

恒沙のごとくして、また知ること能わじ」とおぼえて候なり。

疑って云わく、唐土の人師の中に、慈恩大師は十一面観音の化身、牙より光を放つ。善導和尚は弥陀の化身、口より仏をいだす。この外の人師、通を現じ徳をほどこし三昧を発得する人、世に多し。なんぞ権実二経を弁えて法華経を詮とせざるや。

答えて云わく、阿竭多仙人外道は、十二年の間、耳の中に恒河の水をとどむ。婆籔仙人は自在天となりて三目を現

ず。唐土の道士の中にも、張階は霧をいだし、欒巴は雲を吐はく。第六天の魔王は仏の滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の経を説くべしと見えたり。通力をもって智者・愚者をばしるべからざるか。ただ仏の遺言のごとく、一向に権経を弘めて実経をついに弘めざる人師は、権経に宿習ありて実経に入らざらん者は、あるいは魔にたぼらかされて通を現ずるか。

ただ法門をもって邪正をただすべし。利根と通力とにはよ

るべからず。

文応元年太歳庚申五月二十八日（ぶんおうがんねんたいさいかのえさるごがつにじゅうはちにち）

鎌倉名越（かまくらなごえ）において書き畢（か）わんぬ。（お）

日蓮（にちれん）　花押（かおう）